

「アレクサンダとぜんまいねずみ」 内容とあらすじ・ポイントを解説

「アレクサンダとぜんまいねずみ」の作者について

「アレクサンダとぜんまいねずみ」は、レオ＝レオニさんが 書いたお話だよ。

レオ＝レオニさんは、ほかにも 『あおくんときいろちゃん』や『スイミー』などの本も 書いているよ。

レオ＝レオニさんが 書いたお話を たにかわ しゅんたろうさんが 日本語に 書き直したんだ。

『スイミー』も、たにかわ しゅんたろう さんが 日本語に 書き直したよ。

「アレクサンダとぜんまいねずみ」登場人物



【アレクサンダ】

人間のうちの かべの下の あなに すんでいるねずみ。人間に見つかる
と、悲鳴ひ めいをあげられたり、ほうきで おいかけられたりして、きら
われていたよ。

【ウイリー】

おもちゃの ぜんまいねずみ。せなかのねじを 回してもらうと、動くよ。
アニーという 人間の子の お気に入りのおもちゃで、かわいがられていた
よ。

【まほうのとかげ】

生きものを ほかの生きものに かえることのできる ふしぎなどかげ。

【アニー】

アレクサンダが すんでいる うちの 人間の 女の子。ぜんまいねずみの
ウイリーが お気に入りだよ。

「アレクサンダとぜんまいねずみ」のあらすじ

アレクサンダとぜんまいねずみ

さく：レオ＝レオニ やく：たにかわ しゅんたろう

人間に見つかるたびに、悲鳴をあげられたり、ほうきでおいかけられたりし
ていた、ねずみのアレクサンダ。

ある日、そのうちの アニーという子の お気に入りのおもちゃである、ぜ
んまいねずみの ウイリーと 友だちになりました。

ウイリーが みんなから かわいがられていることを 知った アレクサン
ダは、「ウイリーみたいな ぜんまいねずみになって かわいがりたい」
とねがいます。



ある日、ウイリーから 生きものを ほかの生きものに かえることができる、まほうのとかげの 話を聞いた アレクサンダは、とかげを たずねます。

そして、ぜんまいねずみになるという ねがいをかなえるために、とかげに言われたとおり、むらさきの小石を ひっしでさがすのでした。

ところが、むらさきの小石はいくらさがしても見つかりません。

つかれはてた アレクサンダが うちにもどると、ウイリーが ものおきのすみで 古いおもちゃのはこに入れられ、今にもすてられそうなことを知りました。

そのとき、とつぜん むらさきの小石を 見つけたアレクサンダは 「ウイリーを ぼくみたいだねずみに かえてほしい」と とかげにたのみます。アレクサンダと ねずみになったウイリーは、夜明けまでおどりつづけました。

「アレクサンダとぜんまいねずみ」場面ごとの内容とポイント

「アレクサンダとぜんまいねずみ」の 場めん分けごとに、内容とポイントを かくにんしよう。

場めんは、「場しょ」や「登場人物」、「時間」などが かわったところを ヒントにして かんがえるといいよ。

だれが どんなことを したかな？

アレクサンダのねがいは、お話の中で どのようにかわったかな？

登場人物の セリフや こうどうから、登場人物の ようすや 気持ちを 思いうかべてみよう。



だいの 場めん アレクサンダは 人間にきらわれている



だいの 場めんは、『「たすけて! たすけて! ねずみよ!」』から「ほうきで おいかけてりする。」まで。

【場所】人間のうち（おそらく 台所）

【登場人物】アレクサンダ

【ないよう】アレクサンダは、人間に見つかり、悲鳴をあげられたり、ほうきで おいかけられたりしていたよ。

だいの 場めんでは、アレクサンダの生活や 人間とのかんけいが しょうかいされているよ。

「たすけて! たすけて! ねずみよ!」という 悲鳴から お話が始まるね。

この悲鳴は だれが言ったのかな?



だれが言ったか 名前などは書かれていないけれど、7行目～9行目に「人間は、かれを見つけるたびに、たすけてと悲鳴をあげたり、ほうきでおいかけたりする」という文しょうがあるから、「たすけて！ たすけて！ ねずみよ！」と言ったのは 人間だと よそうできるね。

つまり、アレクサンダは 人間にとっては きらいなあいて、あいたくないあいてなんだね。

ねずみって 小さくてかわいいよね。ミッキーマウスや ぐりとぐらも ねずみだよ。どうして きらわれているんだろう？

ねずみが 人間のうちにすむと、おこめやパン、やさいやくだものなど、人間が食べるものを 食べてしまうから、こまってしまうんだ。だから、家の中で ねずみを見つけると、たいじしたほうがいいと言われてるよ。

なぜ アレクサンダが 人間に見つかったのかというと、一つ二つのパンくずが ほしかったからだね。人間の食べものを すこしだけもらいたくて、出てきたんだ。

「茶わん、おさら、スプーンが、四方八方にとびちった」とあるから、この場めんは、人間が ごはんをじゅんびしている台所じゃないかな。「ガシャン、ガラガラ」という音からも、人間が アレクサンダを たいじしようとして、バタバタと だいこんらんがおきているようすが 思いうかぶね。

アレクサンダは、ちっちな足の 出せるかぎりの スピードで、あなにおかって走ったよ。

「あな」とは アレクサンダのうちだね。

「ちっちな足の 出せるかぎりの スピード」ということは、アレクサンダが走れる中でも、一番早く走った ということだね。



なぜかというと、人間に つかまってしまったら、とじこめられたり、ころされたりしてしまうから、ひっしでにげたんだね。

こんなふうに、アレクサンダは 人間から きらわれていたよ。

「かれを見つけるたび」とあるから、この場めんは 一回だけおきた できごとではないんだ。

アレクサンダは、人間に 見つかるたびに いつも 悲鳴をあげられたり、ほうきで おいかけられたりして、たいへんな生活を送っていたんだね。

だい二の 場めん アレクサンダは ウィリーと出会い、ぜんまいねずみになりたくなる



だい二の 場めんは、「ある日」から『みんなに ちやほや かわいがられてみたいなあ。』」まで。



【時間】 ある日

【場所】 アニーのへや

【登場人物】 アレクサンダ、ウイリー

【ないよう】 アレクサンダとウイリーが友だちになったよ。かわいがられているウイリーの話聞いて、アレクサンダは ぜんまいねずみになりたいと思ったよ。

だいニの場めんでは、ウイリーという おもちゃのねずみが どうじょうするよ。
アレクサンダとウイリーの 生活や 人間とのかんけいのちがい を見つけよう。

アレクサンダは アニー（人間の子の名前）のへやで キーキーいう音がするのを聞いて、しのびこんだよ。

「なんの音かな？」と気になって、そっとへやに入ってみただね。

そこでアレクサンダは もうーぴきのねずみにあったよ。

どんなねずみかというと、「足のかわりに 車がついていて、せなかにはねじがある」ねずみだね。

アレクサンダは 「きみ、だれ？」と聞いたよ。

ぜんまいねずみを はじめてみたから、「ねずみみただけれど、ぼくとはちがう体をしているな。 いったいだれなんだろう？」と ふしぎだったんだね。

ぜんまいねずみは「ぼく、ウイリー。」とこたえて、

「アニーのお気に入りのおもちゃ」

「みんなちやほやしてくれる」

「夜になると、白いまくらをして、人形とぬいぐるみのくまの間で、ねむる」などと 教えてくれたよ。

「お気に入りのおもちゃ」ということは、おもちゃの中でも、とくべつに大事にされて、よくあそばれている おもちゃだよ。



それに、あそんでいる時だけではなくて、ねる時も、まくらをセットしてもらったり、さみしくないように 人形たちといっしょにねかせてもらっていることから、アニーが とても大事にしていることが わかるね。

この話を聞いたアレクサンダは、

「ぼくは あんまり大事にされていない。」と かなしそうにいったよ。きっと「おもちゃのねずみだったら、大事にしてもらえるんだな」「ぼくとは おおちがいだ」「人間に かわいがってもらえるなんて、いいな」と 思ったんだね。

でも、アレクサンダは、友だちが見つかって うれしかったよ。

きっと 今まで 一人ぼっちだったし、人間にも きらわれているから、自分のことを きらわなくていてくれて、話ができる あいてができて うれしかったんじゃないかな。

アレクサンダが パンくずさがしにさそうと、ウイリーは 「ねじを まいてもらった時しか うごけない。でも、いいさ。みんな ぼくを かわいがってくれる。」と答えたよ。

「でも、いいさ」という言ばや「かわいがってもらえる」と くりかえしているところから、ウイリーは「自ゆうに動けないのは ざんねんだけど、かわいがってもらえていることのほうが いいことだ。アニーのとくべつなおもちゃでいられて、しあわせさ。」と 思っていたんじゃないかな。

アレクサンダとウイリーは いろんな話をしたよ。

アレクサンダは、ほうきや、空とぶおさらや、ねずみとりとのぼうけんを話したね。

つまり、アレクサンダの生活は、人間においかけられる できごとばかりだったことがわかるね。

ウイリーは ペンギンやぬいぐるみのくま、アニーの話をしたよ。

ウイリーの話から、なかまがいることや、アニーに大事にされている生活をおくっていることが わかるね。



アレクサンダは、ウイリーをうらやむこともあったよ。

なぜかという、「ウイリーみたいな ぜんまいねずみになって みんなにちやほや かわいがられてみたいなあ」と思ったからだね。

「ああ！」というためいきからも、「ぼくなんてきらわれているのに…」

「ひとりぼっちでさみしいな。ウイリーみたいにかわいがられたら、しあわせだろうな」「ウイリーの生活と どうしてこんなに ちがうんだろう」とおちこんでいる気持ちを そうぞうできるね。

アレクサンダとウイリーのちがいを くらべてみよう。

	アレクサンダ	ウイリー
すんでいるところ	かべのしたのあな くらやみの中で ひとりぼっち	アニーのへや 白いまくら 人形とぬいぐるみの間で ねる
人間とのかんけい	悲鳴をあげられる ほうきでおいかけられる 大事にされない	アニーのお気に入り かわいがられる ちやほやされる
お話のないよう	ほうきや、空とぶおさらや、ねずみとりのぼうけんの話	ペンギンやぬいぐるみのくま、アニーの話
動き方	二本のちっちゃな足で 自ゆうにうごける	ねじをまいてもらった時しかうごけない

アレクサンダの生活「さみしい、くらい、あぶない」

⇔ウイリーの生活「うれしい、しあわせ、あんぜん」だね。



だい三の 場めん アレクサンダは まほうのとかげの話聞く



だい三の 場めんは、「ある日」から『きみみたいな ぜんまいねずみに
かえられるっていうの?』まで。

【時間】ある日

【登場人物】アレクサンダ、ウイリー

【ないよう】ウイリーが アレクサンダに 生きものを ほかの生きものに
かえることができる まほうのとかげの話をしたよ。

ウイリーは アレクサンダに まほうのとかげの話をしたよ。

どんなとかげかという、 「生きものを ほかの生きものに 変えることが
できる」とかげだね。

この話を聞いた アレクサンダは、「ぼくを、きみみたいなぜんまいねずみ
にかえられるっていうの?」といったよ。



アレクサンダは 「え！？本当？ まほうのとかげに会えれば、ぜんまいねずみになって、ちやほやされたいという ねがいが かなうの？」と、きょうみをもったんだね。

きっと 顔も心も ぱっとかがやいたんじゃないかな。

だい四の 場めん アレクサンダは まほうのとかげに むらさきの小石を もってくるように いわれる



だい四の 場めんは、「その日の午後」から『「むらさきの小石を もっておいで。」』まで。

【時間】 その日の午後

【場所】 にわの小道のはじ

【登場人物】 アレクサンダ、とかげ

【ないよう】 アレクサンダは とかげに まんげつの夜、むらさきの小石を もってくるように 言われたよ。

アレクサンダは にわへ行き、小道のはじまで走ったよ。



「その日の午後」とあるから、ウイリーから まほうのとかげの話聞いたのは午前中で、その後すぐに まほうのとかげを さがしにいったんだね。

「さっそく」という言ばや 「走っていった」という 行どうからも、「やったー！ぜんまいねずみになれるんだ！」 「早くまほうのとかげに会いたいな」と まちきれないことが わかるね。

アレクサンダが よびかけると、とかげは出てきたよ。

とかげは、花々とちょうちょうの色をした 大きなとかげだったね。

お話といっしょに かかれている絵を見ると、とかげは 花やちょうちょうみたいな きれいで 明るい色が たくさんまざった 体をしているね。とてもめずらしくて、ふしぎな力を もっていそうだね！

アレクサンダは「ぼくを、ぜんまいねずみに かえられるって、ほんと？」と きいたよ。

「ふるえ声」とあるから、きんちょうしていたんだね。

「ぜんまいねずみになりたい」というねがいは、ウイリーにとって 大事なねがいだったから、ドキドキしながら 聞いたんだね。

とかげは 「月がまん丸の時、むらさきの小石をもっておいで。」と言ったよ。

つまり、とかげは アレクサンダをぜんまいねずみに かえてあげることができると、そのためには まん月の日に むらさきの小石を もってくるひつようが あったんだね。



だい五の 場めん アレクサンダは まほうのとかげに ウイリーをねずみにかえてほしいと たのむ



だい五の 場めんは、「来る日も来る日も」から「むらさきの小石は きえていた。」まで。

【時間】 来る日も来る日も

【場しょ】 にわ、ものおきのすみ

【登場人物】 アレクサンダ、ウイリー、とかげ

【ないよう】 アレクサンダは、ウイリーがすてられそうだと知ったよ。アレクサンダは、とかげに ウイリーをねずみにかえてほしいと たのんだよ。

むらさきの小石をさがす

アレクサンダは にわで むらさきの小石を さがしたよ。

「来る日も来る日も」という 言ばから、「ぜんまいねずみになりたい」という気もちが とても強くて、毎日ひっして あきらめずに さがしていたことが わかるね。

けれども、むらさきの小石は 一つもなかったよ。



「黄色い小石、青い小石、みどりの小石、一」の「一」には、黄色や青、みどりがいのほかの色の小石も 見つかったことを あらわしているんじゃないかな。

ほかの色の小石は たくさん見つかったのに、むらさきの小石は なかったんだね。

ウイリーが すてられそうだと 知る

つかれはてたアレクサンダは うちへもどったよ。

そして 古いおもちゃで いっぱいのはこの中に、つみきと こわれた人形にはさまれて ウイリーがいるのを 見つけたよ。

アレクサンダは「どうしたの?」と言ったよ。

アニーのへやにいるはずで、いつもかわいがられているウイリーが まるでいらなくなったごみのように ほうっておかれていたから「いったいなにかあったのかな?」と おどろいたんだね。

ウイリーが なぜ 古いおもちゃで いっぱいのはこの中に いたかという

と
アニーが たんじょう日に 新しいおもちゃを もらったからだね。

つまり、それまでつかっていたおもちゃや こわれたおもちゃは いらなくなってしまうんだ。

この話を 聞いたアレクサンダは 「かわいそうに、かわいそうなウイリー!」と思ったよ。

「なかんばかり」とあるから、 今にもなきだしそうな気もちだったんだね。

「あんなに大事にされていたのに ひどいな」「ウイリーがすてられるなんて かなしいな」「せっかく友だちになれたのに、もう会えなくなってしまう」「ウイリーもつらいよね、だいじょうぶかな」という 気もちだったんじゃないかな。

人間に きらわれていた アレクサンダだから、大事にされないかなしさも



自分のことのように わかったんじゃないかな。

とかげに ウイリーを ねずみにしてほしいと おねがいはする

とつぜん、アレクサンダは むらさきの小石を 見つけたよ。

「ゆめじゃないかな……？ いや、本当だ！」とあるから、アレクサンダもしんじられないくらい おどろいたことが そうぞうできるね。

アレクサンダは むらさきの小石を しっかりうでにだき、まほうのとかげのところへ行ったよ。

「おねをどきどきさせて」「小石をしっかりと うでにだき」「走り出た」「いきをきらして」という ようすや行どうから、「ついにねがいがかなう！」と いう気もちでいっぱいだったんだね。

とかげは 「おまえは、だれに、それとも、何になりたいの？」と言ったよ。

アレクサンダは「ぼくは……」と 言いかけてやめたよ。

そして、

「とかげよ、とかげ。ウイリーを、ぼくみたいなねずみにかえてくれる？」と言ったね。

アレクサンダのねがいは、「ぜんまいねずみになって かわいがられたい」だったはずだよ。

そして、そのために ひっして むらさきの小石を さがしていたよね。

でも、「ウイリーをぼくみたいなねずみにかえてほしい」と ねがいをかえたね。

アレクサンダは どうしてねがいをかえたのかな？

それはきっと 「ぜんまいねずみになって かわいがられる」ことよりも、「友だちのウイリーをたすけたい」「ウイリーと ずっといっしょにいられるほうが しあわせ」と 気づいたんじゃないかな。

「ぼくは……」と 言いかけたところで、心からのねがいは「ウイリーとずっ



と友だちでいること」だと はっきりと気づいたんだね。

この場めんて、アレクサンダの気持ち（ねがい）が 大きく かわったね。
「ぼくは……」の文しょうで、アレクサンダの気持ちが かわったと考える人もいるよ。

とかげのもとに走って行ったり、大いそぎでとかげをよんだりしているところから、だんだんと 気持ちが かわっていったんじゃないかと 考える人もいるよ。

だい六の 場めん アレクサンダとウィリーは おどりつづける



だい六の 場めんは、「アレクサンダは」から「夜明けまでおどりつづけた。」まで。

【場所】うち（かべの下のあな）

【登場人物】アレクサンダ、ウィリー

【ないよう】アレクサンダと ねずみになったウィリーは だきしめ、おどりつづけたよ。



アレクサンダは、走れるかぎりのはやさで、うちへかけもどったよ。
だいの場めんでも、ちっちゃな足の 出せるかぎりのスピードで 走って
いたけれど、それは 自分のいのちを まもるためだったね。
だいの場めんでは、ウイリーの いのちをまもるため（すてられてしま
う）から、いそいだんだね。

アレクサンダは、「おそかった。」と思ったよ。
なぜかという、はこは空っぽだったから、ウイリーはすてられてしまった
と考えたからだね。

アレクサンダは、おもい心で、あなへもどりかけたよ。
「ウイリーがすてられてしまったなんて、かなしい」「友だちを うしなっ
てしまった」と かなしさやくさしさ、さみしさがまざったような どんよ
りした気もちだったんだね。

ところが、あなの中には 一ぴきのねずみがいたよ。
アレクサンダは 「きみ、だれ？」と こわごわ聞いたね。

「こわごわ」ということは「ウイリーだったらうれしいけれど、そんなはず
がないよね」と 半分しんじて、半分うたがうような気もちで おそるおそ
る聞いたんじゃないかな。
そのねずみは、「ぼく、ウイリーだよ。」とこたえたよ。

だいの場めんと だいの 場めんでは 「きみ、だれ？」「ぼく、ウイ
リーだよ」という 同じ会話が 登場しているよ。
だいの 場めんの「ぼく、ウイリーだよ」は じこしょうかいだけれど、
だいの 場めんの「ぼく、ウイリーだよ」は じこしょうかいではなく
て、「たすけてくれてありがとう」「また会えて 本当にうれしいよ」「き
みと友だちになれて、なんてしあわせなんだろう」という気もちが こめら
れているんじゃないかな。



お話といっしょに かかっている絵をみると、車とねじがなくなって、足がはえているねずみが ニひきいるね。

アレクサンダが とかげにおねがいしたことが かなって、ウイリーは ぜんまいねずみから 本もののねずみに かわったんだね。

アレクサンダは「ウイリー！」と言ったよ。

この「ウイリー！」という みじかい一言には、ぶじにウイリーをたすけることができほっとした気持ちや またウイリーに会えてうれしくてたまらない気持ちが つまっているよ。

アレクサンダは、ウイリーをだきしめて、ニひきはにわの小道へ走り出たよ。

そして、夜明けまでおどりつづけたね。

二人とも うれしくてたまらない気持ち、これからもいっしょにいられるよろこびが おさえきれないようすが ひしひしと つたわってくるね。

「アレクサンダとぜんまいねずみ」作者がつたえたいこと

アレクサンダは ぜんまいねずみになって かわいがられることを のぞんでいたけれど、人間においかけられるという たいへんなことがあっても、友だちといっしょにいられることが しあわせだと気づいたよね。

自分のねがいのためだけに さがしていたときは 見つからなかった むらさきの小石が ウイリーのいのちがあぶないことを かなしんでいた時に見つかったのは 友だちがいることのたいせつさや 自分にとって なにが一番大事かを 気づかせるためだったのかもしれないね。

作者はきっと わたしたちに たいへんなことがあっても、なかまがいることのすばらしさやありがたさを つたえたかったんじゃないかな。



そして、ほかのだれかになろうとしたり、見かけのしあわせをさがすのではなくて、自分にとってなにが一番大事なのかに気づくことがたいせつだということもつたえたかったんじゃないかな。

「おまえは、だれに、それとも、何になりたいの？」というとかげの言ばはわたしたちにとっても本当に一番大事なことは何かを考えさせられる、心にひびくメッセージだね。

「アレクサンダとぜんまいねずみ」言葉の意味

「アレクサンダとぜんまいねずみ」で出てくる言葉の意味をまとめているよ。

ことば	いみ
悲鳴	こわいときや、びっくりしたときに、大きな声でさけぶこと
四方八方	まえも、うしろも、みぎも、ひだりも、ぜんぶのほうこうのこと
出せるかぎりのスピード	もっている力のかぎり、いちばん早く走ること
しのびこむ	見つからないように、こっそり入ること
ぜんまい	おもちゃをうごかす、まわるバネのこと
ちやほやする	すぐくほめて、たいせつにすること
大事にされる	みんなから、とてもたいせつに思われること
すきをみる	相手がぼんやりしているときや、あいていないところを見つけること
おもに	いちばんたいせつなこと
かくれ家	誰にも見つからない、ひみつのばしょのこと
うらやむ	相手の持っているものが、自分もほしいなあと思うこと
ためいきをつく	つかれたときや、かなしいときに「はあ」と息をはくこと
ひみつめかす	「めかす」とは、「それらしくする」ということ。なので、ひみつっぽくすること。
ふるえ声	こわくて、声がふるふるすること
つかれはてる	とてもつかれて、もう動けないくらいになること
明くる日	次の日のこと



ことば	いみ
なかんばかり	もうなきそうなくらい、かなしい気持ちのこと
目に入る	見えること
いきをきらす	走ったあとみたいに、はあはあすること
月がみちる	月がまんまるになること
目もくらむ	まぶしくて、よく見えなくなる
用心深く	気をつけて、危ないことがないかよく見るようす
こわごわ	こわいけど、少しずつやってみようす

「アレクサンダとぜんまいねずみ」新しい漢字

漢字	音よみ	くんよみ
悲	ヒ	かな(しい) かな(しむ)
鳴	メイ	な(る)
事	ジ	こと
所	ショ	ところ
深	シン	ふか(い)

